



TITLE:

<批評・紹介> 胡適蔡元培王雲五編
「張菊生先生七十生日記念論文集」

AUTHOR(S):

小川, 茂樹

CITATION:

小川, 茂樹. <批評・紹介> 胡適蔡元培王雲五編「張菊生先生七十生日記念論文集」. 東洋史研究 1937, 2(4): 364-368

ISSUE DATE:

1937-04-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/138747>

RIGHT:

批評・紹介

張菊生先生七十生日記念論文集

胡適蔡元培王雲五編

商務印書館の四庫叢刊正續三編・四庫珍本叢刊・百衲本二十四史その他の古典の覆刻普及版の印行が現代の支那學者特に東洋史學者に如何に大なる便宜を與えてゐるかこゝに縷述する迄もない。今張元濟菊生氏に贈られた記念論文集を手にして我等は改めて此の事業の企劃者である張氏の多年の努力に對する敬意と感謝を捧げ登載論文中央學關係のものに就て紹介を試みた。

胡適氏の「述陸賈的思想」は民國十九年頃の舊稿と斷つてあり、且つその四庫提要の陸賈新語が偽書とする説に對する反駁の部分は、嘗て陸賈新語考として北平圖書館刊に發表されてゐる。四庫提要の新語偽書説の辯駁は早く清朝の嚴可均によつて發せられ、最近胡

氏の作と並んで、羅根澤余嘉錫の諸氏も各々論考あり（古史辨第四冊）、殆ど論破され盡したと言つてもよい。此の論文で重視すべきは、勿論この冒頭の部分ではなくて、陸賈の思想を論じた後半部である。その思想が荀卿韓非を承けた事は、歴史觀に於て韓非の古史を上古、近古に分けたのを繼いで先聖中聖、後聖の制作を述ぶる點でも明らかであつて、大體に於て荀卿韓非二者を調和しながら、後王に法るべきの論據を荀卿の古今同理説を排して韓非の古今時勢不同説に求る點に於ては、韓非李斯に近しとする。之等の前行學說との關係及びその無爲政治の出張が秦始皇の急進的法治主義に對する反動である點等を考ふる時、新語が思想的に漢初期、陸賈の時代に屬せしめ得ると考へてゐる。論述極めて簡潔であるが、その易繫辭と關連する法家の歴史觀、先聖制作史論など頗る示唆に富むものがある。唯、氏は陸賈新語の思想史的位位置を先行の荀韓李諸子との連關に於てのみ眺め、後行のものとしては淮南子のみを執つてゐるが、漢文帝時代の陸賈とは思想的に近い賈誼との連絡對比が考へられてゐないのは残念である。

陶希聖氏の「唐代經濟景況的變動」は著者が北京大學法學院中國經濟史研究室に於ての唐代經濟史料を編纂中集めた唐代一般の社會景況に關する資料を纏めたと斷つてある。經濟景況の題は本論文の内容と適合せぬ。陶氏は主として戸口現實の人口——實數統計としてよりも、寧ろ政府の搜括能力の表現として考へるのであるが——の消長を指標として、唐代の一般社會情勢の變化を大觀せんとするのである。されば氏が最後の但し書きに使用した一般社會景況の語の方が適切である。特に戸口を指標とする點に於て、加藤博士の研究に刺戟を受けてゐるらしい。陶氏が鞠清遠氏との共著に成る「唐代經濟史」に於ける加藤博士を中心とする我が經濟史研究の影響の濃厚なるに徴しても一斑が察せられる。然し嚴格な意味の經濟史的研究よりも、寧ろ「中國政治思想史」或は「中國社會現象零拾」、「辯士と游侠」などに示した文化史的な綜合に長する才能がこゝで遺憾なく發揮せられてゐる。經濟史或は社會史の論文としてより、通史的、文化史的な論文として見るならば好箇の作品であらう。

孟森氏の「己未詞科錄外錄」は清朝三次制科の中第

一次の康熙己未十八年の博學鴻詞科の側面史を描いた作である。己未詞科は聖祖が三藩尙平定せず、人心不安の際、漢人の歡心を得るため、孟森氏の指摘する處によれば特に南方江南の名族、德望ある者を羈下に致さんとした一の文化政策であつた。然もその際に或は此の詞科に應ぜず、自ら高しとした者、或は己むなく詞科に應じて後直ちに歸郷し身を清くした傳山の如きあり、詞科に應じて官途に就ける者に對しては當時より種々の非難が集中せられてゐる。然しながら、相互に仲傷する讀書人の複雑なる心理を考ふるとき、當時の論議を表面的に、其儘に受取るとは慎まねばならぬ。例へば己むなく詞科に應じた後、直ちに故山に歸つた傳山の行動の如き、一世にその名を馳せてはゐるが、孟氏は内閣大庫所藏の檔案によれば、傳青主自身之に先つた或事件に於て全く清朝に屈服して居るのであるから、實に康熙帝との默契の馴合ひの芝居に過ぎぬと斷するのである。その點迄云ひ得るか否か、事は頗る機微に屬するが、兎に角己未詞科を中心とした同時の讀書人の複雑な心理の動きは他國の學者では一寸理解に難いものがあつて、清朝掌故に老熟した氏の洞

察に敬意を表せざるを得ない。孟森氏の清朝遺老的な感慨が、兎角康熙大帝の辯護に走らんとする傾向に對しては多少の警戒を必要とするは勿論であるが。

謝國楨氏の「近代書院學校制度變遷考」は清朝書院制度を客觀的に論述したものではなくて、主觀的な追憶感慨の情に充ちた論文である。特に書院制より學校制への過渡期を劃する康南海の長興學堂、梁啓超の時務學堂に對する王先謙、葉德輝等の反動の如き極めて生々しい筆を以つて論ぜられてゐる。

吳其昌氏の「甲骨金文中所見的殷氏農稼情況」は副題によると中國文化史國民經濟篇田制章の第一節である。恐らく、同氏の武漢大學社會科學季刊に載せられた同氏の「秦以前中國田制史」等と一連をなす著作であらう。本論文に於て氏は殷虛卜辭を材料として殷代の産業の形態を論ぜんとする。氏は卜辭に見える殷王の狩獵の例を列舉し、その狩獵の對象を分類し、殷代を狩獵牧畜時代と規定する。同じく卜辭の祭祀記事により主要食料は牛羊等の家畜の肉を第一とし、次に黍稷より釀された酒醴が飲料とされ、その黍の收穫の豊凶を卜することが屢卜辭に現れることに注意し、黍は

その穀物を粒食するに先ち、殷代では専ら釀造の用に供するため栽培せられたとする。次に氏は詩書金文を資料とし、この酒醴の飲用と共に殷周の交には黍酒の糟が食用に供せられ、之が周代に於て次第に進化し、飯として食用に供するに到つたと論ずる。かくて卜辭の食料を中心として、殷代は狩獵游牧肉食飲酒の時代であり、農業は補助的に唯、酒苗として黍稷栽培のみに向けられたと云ふのである。この最後の殷代の飲酒哺糟の俗を考察された段は極めて新しき着眼點である。但卜辭の史料としての性質が顧慮されてゐないのは遺憾だ。即ち卜辭が殷の王室の卜辭であり、王室の行事を示すのであるから、王の狩獵の例多しとしても或は儀禮的或は遊樂的な貴族の行事であり得るし、一般人の生活形態を論じ得るか否か。又卜辭の王室の祭祀に用ゐられる犠牲、或は供物等の聖なる儀式に於ける聖なる食料が、直ちに一般人民の常用の食料と考へ得るか否か。之は尙充分考慮の餘地があると思はれる。我等は此點に關して、支那學誌上に於ける小島博士と丹羽學士の論争を回顧する必要がある。

馬衡氏の「關於鑒別書畫的問題」は、最近支那に於

て漸く好事家的な見地から離れて美術史的な研究が萌芽を見せつゝある氣運を表徴してゐる。書畫の眞偽鑒別は、偽物製作が専門技術として無比の發達をしてゐる支那に於て、美術史研究が第一に當面する實際問題である。氏は故宮書畫を實例として文獻と對比して論ぜられてゐる。

滕固氏の「南陽漢畫像石刻歴史的及風格的考察」は今迄關白益の南陽漢畫集及び孫文青の南陽漢書訪榻記によつてしか知られなかつた南陽の漢書像石を、その拓本實測圖を示して全般的に紹介し、更に美術史的な研究をなさんとする。唯、その實測は主として同地出身の董作賓氏に據り、直接の調査でない爲か、實物の記述が甚だ明晰を缺くのは遺憾である。然して氏は此の論文に於て、漢代の畫像石に二つの型式があり、一は山東省の孝堂山、武梁祠の淺い線畫的刻像と、一は南陽のその如き浮彫り的なものとの二類に分たれるとし、前者を繪畫的後者を彫刻的とされ、南陽畫像石は當に其浮彫的な代表として、彫刻として考察せらるべきだと云ふ。漢代畫像石にこの二類の存在することは認められ得ることである。氏は南陽漢畫の年代

の決定に於て、之を東漢早期の時代に屬すとされるに就て、その彫刻的を技法を以て主要な論據としてゐるらしい。漢書像石に於ける此の二類の年代的の先後の關係如何は俄に決定し難い。たとひその發生に於て彫刻的な後者が、繪畫的な後者に先行するとしても、後漢の或時代に於て兩者相並存してゐることも想像し得るのであつて、その技法の性質が直ちに年代の早晚を決定する鍵とはならないのではなからうか。

朱希祖氏の「西魏賜姓源流考」は嘗て劉盼遂・王桐齡・陳寅恪・金井學士等によつて捲き起された李唐は蕃姓か否かに就ての論争に關係して、蕃姓論者に對する一の反駁論と見得る。特に王桐齡の蕃姓説に於ける重大な誤謬即ち隋唐先世たる李虎楊忠が西魏の文帝大統年間に大野・普六茹の二氏を賜つたのを本來胡族たる李楊二氏の復姓と解釋する事を正したものである。王氏の誤は已に陳寅恪氏の李唐氏族の推測後記に於ても指摘されてはゐるが、朱氏は北魏大和の復姓と大統賜姓復姓を一般的に考察する事によつて、更に精密に論證してゐる。朱氏の考によると賜姓と、復姓とは相區別さるべきであり、北魏の太和の改姓によつて胡の復姓

が改められて漢姓に似た單姓に改められたが、大統の復姓はこの單姓から胡の復姓への復歸を意味する。而て大統の復姓と相並んで賜姓の事あり、漢人に胡姓、胡人に胡姓を賜つたのであつて、李楊二氏の收姓は當に漢人に對する賜胡姓に外ならぬとする。此の事は大統賜姓を更に原姓へ復ささんとした周靜帝の第二次の復姓の詞勅によつて明白なのである。朱氏は西魏賜姓の實例六十餘例に就て一々辨析し堂々六十餘頁の長文をなしてゐる。之によつて蕃姓論者の誤の點のみならず、北方族の改姓賜姓の經緯が明確となつた事は喜ばしい。唯李唐が果して蕃姓か否かに就ては、非蕃姓論者と雖本源は兎も角として、母系を通じた胡族の血液の混入と胡風の習染は之を認むるものである以上、今は本來の姓如何に深く固守する要はないと思はれる。

（近刊叢覽參照）

（小川茂樹）